



Title	ウズベク語における形動詞・動名詞の統語機能：連体修飾に着目して
Author(s)	日高, 晋介
Citation	北方言語研究, 8, 91-105
Issue Date	2018-03-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/68731
Type	departmental bulletin paper
File Information	05hidaka.pdf



ウズベク語における形動詞・動名詞の統語機能 —連体修飾に着目して—

日 高 晋 介

(東京外国語大学大学院 博士後期課程)

1. はじめに

本稿はウズベク語における形動詞・動名詞の統語機能のうち、特に連体修飾に着目する。

Johanson (1998, 2006) を参照する限り、チュルク諸語の「連体修飾句＋被修飾名詞句」は形容詞修飾、所有複合、同一並置の三つの構造に分類されると考えられる。特に Johanson (2006: 76) は、アルタイ語の形動詞＋被修飾名詞 *kelgen kiži* 「来た人」が同一並置であると述べている。このことから、アルタイ語と同じくチュルク諸語に属し言語構造が似ているウズベク語でも同様の解釈が成立することが予想される。そこで本稿ではウズベク語の形動詞および動名詞による連体修飾が、上の三つの構造のどれに合致するかを検討する。その結果、次の二点が明らかとなった: 1. 動名詞は所有複合に近い特徴を持つ、2. 形動詞は所有複合に近い特徴も持つ一方、同一並置と形容詞修飾の特徴とも完全に一致しない。以上から、ウズベク語の形動詞＋名詞という構造は同一並置ではないと結論づける。

本稿の構成は次の通りである。2 節で先行研究の記述を参照し問題提起を行う。続く 3 節で分析・考察を述べ、4 節で本稿のまとめを述べる。なお、本稿の例文番号、グロス、日本語訳はことわりのない限り筆者による。ウズベク語の表記は、先行研究の表記法に関わらず、ラテン文字正書法に統一する。

2. 先行研究

まず、2.1 節でウズベク語の形動詞・動名詞について、先行研究の記述を基に概観する。次に、2.2 節でチュルク諸語、特に南シベリアのチュルク諸語における形容詞と名詞の区別に関する研究 (Johanson 2006) を参照する。最後に、2.3 節で問題提起を行う。

2.1. ウズベク語の形動詞・動名詞

先行研究では、形動詞の基本的な機能は連体修飾であるとしている (Reshetov va boshq. 1966: 324, Abdurahmonov va boshq. 1975: 510)。形動詞の機能はそれだけでなく、名詞節述語としても機能する (Asqarova va Jumaniozov 1953: 15, Abdurahmonov va boshq. 1975: 510)。次に連体修飾節述語 (1) と名詞節述語 (2) として機能する例をそれぞれ挙げる。

- (1) [*falokat yuz ber-gan*] joy
disaster surface give-PTCP.PAST place
「災害が起きた場所」(Bodrogligeti 2003: 617)

- (2) *A B-ga [C olma-ni ye-yotgan-i-ni] ayt-di-ø.*
NAME NAME-DAT NAME apple-ACC eat-PTCP.PROG-3.POSS-ACC say-PAST-3SG

「A は B に C がリンゴを食べていると話した。」(日高 2016: 148)

(3) のように、主要部がない連体修飾述語としても機能する場合もある。(3) の *jarohat ko 'r-gan-lar* 「負傷した人々」は、形動詞 *jarohat ko 'r-gan* 「負傷した」の後に *odam-lar* [person-PL] 「人たち」が省略された形式であると考えられる。

(3) *Qurbon-lar va [jarohat ko 'r-gan-lar] borasida aniq raqam*
victim-PL and injury see-PTCP.PAST-PL concerning clear number
ber-il-gan-i yo 'q.
give-PASS-PTCP.PAST-3.POSS no

「犠牲者と負傷した人たちに関してはっきりした数はわからない (lit.与えられたことはない)。」(<https://www.ozodlik.org/a/27187144.html> [最終閲覧日: 2017/12/16])

表 1 に形動詞接辞¹を挙げる。これらにそれぞれ抽象名詞化接辞 *-lik* が付いて名詞節述語としてのみ機能することもある²。

表 1: 形動詞接辞一覧

過去	現在進行	非過去
<i>-gan/ -kan/ -qan</i>	<i>-(a)yotgan</i>	<i>{-a/ -y}digan</i>

次に動名詞について、先行研究の記述を参照する。Abdurahmonov va boshq. (1975: 525) では、*-(i)sh*, *-(u)v*, *-moq* 三つの接辞が「動名詞」(Harakat nomi) を形成するとしている。本稿では、その三つの接辞のうちの一つである、*-(i)sh*³ (否定形 *-maslik*⁴) について取り上げる。

¹ 先行研究では *-g'lik/-rlik/-gulik* に加え、*-ajak/-gusi/-asi*, *-(a)r/-mas*, *-(u)vchi* も挙げられているが、本稿ではこれら进行分析・考察の対象外とする。Abdurahmonov va boshq. (1975: 515) は、*-g'lik/-rlik/-gulik* は否定も時制も表さないため、形動詞のカテゴリーに入らないと述べる。さらに筆者は、*-g'lik/-rlik/-gulik* に加え、*-ajak/-gusi/-asi* も、共時的な視点から形動詞とはみなさない。これは次の二つの理由による。まず生産性が非常に低いことが挙げられよう。筆者の経験からは、*kel*-「来る」や *bo 'l*-「なる」から *kelajak*, *kelgusi*, *kelasi*; *bo 'lajak*, *bo 'lgusi* (いずれも「未来」) という語しか作ることができない。以上より、本稿は *-g'lik/-rlik/-gulik*, *-ajak/-gusi/-asi* を形動詞と見なさず、分析・考察の対象外とする。さらに、*-(a)r/-mas* は生産性が低く名詞類派生接辞と見なせるため (詳しくは Hidaka 2016 を参照されたい)、また、*-(u)vchi* は頻度が低いいため、これらも分析・考察の対象外とする。

² したがって、*-gan + -lik* は *-gan-lik* と分析することが可能である。しかし、本稿では分析せずに *-ganlik* と表記する。その理由は、分析してしまうと形態論的な整合性が取れなくなるためである。つまり形動詞の直後に付くような接辞は複数・所有人称・格であり、派生接辞は付かない。

³ Abdurahmonov va boshq. (1975: 525) では、*-(i)sh*, *-(u)v*, *-moq* 三つの接辞が「動名詞」(Harakat nomi) を形成するとしている。本稿では、その三つの接辞のうちの一つである、*-(i)sh* について取り上げる。これには二つの理由がある。一つに、Abdurahmonov va boshq. (1975: 527) は、動名詞の中でも *-(i)sh* が非常に多く用いられ、*-(u)v*, *-moq* は *-(i)sh* に比べると多く用いられない、と述べていること。二つ目には、三者それぞれに機能的な差異はないということがある。これは、本節で挙げる先行研究において、三者それぞれに機能的な差異があるという記述がないことに従っている。

⁴ Abdurahmonov va boshq. (1975: 525-7) は「動名詞」の項で *-maslik* を取り扱っていない。一方、Bodrogligeti (2003: 575) では、*-maslik* は *-moq*, *-(i)sh* の否定形である、としている。

- (4) *o'z ish-i-ni shu qadar puxta bil-ish-i...*

REFL work-3.POSS-ACC that like well know-VN-3.POSS

「彼が彼自身の仕事をそのようによく知っていること…」 (Bodrogligeti 2003: 572)

最後に、形動詞・動名詞を用いた連体修飾の方法について述べる。これには二つある。一つは形動詞による直接修飾である ((1) を参照されたい)。この場合、基本的に形動詞自体には何も接辞が付かない⁵。もう一つは主要部に所有人称接辞を付すことによる Possessive Compound である。本稿ではこれを「所有複合」と呼ぶ。これは、形動詞 (5)・動名詞 (6) 両方で見られる。

- (5) *Biroq [[ular-ning restoran yaqin-i-da bo'l-ganlig-i] sabab-i]*

but 3PL-GEN restaurant near-3.POSS-LOC be-PTCP.PAST-3.POSS cause-3.POSS

sirligicha qol-moqda-ø.

secret remain-CONT-3SG

「しかし、彼らがレストランの近くにいた原因はわからないままである。」

(<https://daryo.uz/2016/02/10/kasyanovga-hujum-qilingan-restoran-yaqinida-chechen-politsiyachilari-qolga-olindi/> [最終閲覧日: 2017/11/18])

- (6) *[[Pekin-da o'ta zaharli smog-ning paydo bo'l-ish-i] sabab-i]*

NAME-LOC very harmful smog-GEN appearance be-VN-3.POSS cause-3.POSS

aniqla-n-di-ø

make.clear-PASS-PAST-3SG

「北京で非常に有害なスモッグが出現する原因が明らかにされた。」

(<http://kun.uz/uz/news/2017/01/09/pekinda-uta-zaarli-smogning-pajdo-bulisi-sababi-aniklandi> [最終閲覧日: 2017/11/18])

2.2. チュルク諸語における名詞・形容詞の区別

チュルク諸語において名詞・形容詞は形態的観点からはっきりと区別できないため、この二者の区別は長年議論されてきた (特にトルコ語については Johanson 1990: 187-191 が詳しい)。本稿では比較的新しい研究である Johanson (2006) を参照する。これは、南シベリアのチュルク諸語 (つまりアルタイ語、ハカス語、シオル語、トゥバ語、トファ語) における名詞と形容詞の差異について議論している研究である。表 2 にそれらの差異を一覧にする。

⁵ Abdurahmonov va boshq. (1975:512) は形動詞の連体修飾用法でも形動詞自体に所有人称接辞が付く場合があると述べており、次の例を挙げている。

... *natija-da erta bilan haligi ko'r-gan-imiz voqea ro'y ber-gan edi-ø.*
result-LOC morning with in.question see-PTCP.PAST-1PL.POSS event surface give-PTCP.PAST PAST-3SG

「…結果として、私たちが朝に見た例の事件が起こったのだった。」

表 2: 南シベリアのチュルク語における名詞・形容詞の差異

	名詞	形容詞
第一機能	名詞句の主要部を占める。 実体そのものを表す。	名詞句の修飾部を占める。 特性 (寸法、歳、価値、色など) を表す。
第二機能	X	その特性を持つ実体 (人、もの、空間)
第三機能		抽象名詞

名詞句の主要部	第一機能	可 (マーカーなし名詞化)
名詞句の修飾部	同一並置 (等位接続詞による二重修飾 不可、つまり複合の一種)	第一機能 (等位接続詞による二重修飾可)

形容詞 の 特 徴	所有構造への参与	問題なし	第一機能：不可 第二・第三機能：可
	副詞用法	不可	多数
	格支配	不可	可能なものも
	副詞による修飾	不可	多数
	比較	不可	可能なものも
	意味を強める／弱 める要素の付加	不可	可能なものも
	部分重複	不可	可能なものも

(Johanson 2006 の記述を基に筆者作成)

本稿では、連体修飾における統語機能を中心に扱う。そのため、以下から表 2 中央の「名詞句の主要部」「名詞句の修飾部」についての記述を参照する。Johanson (2006: 66) は「名詞が名詞句の修飾部に位置する場合、形容詞の第二・第三用法とは異なり、形容詞化なしで制限的な連体修飾として機能する」と述べている。

(7) ‘railway’ [iron road]:

Altay *temir yol*, Shor *tebir čol*, Tuvan, Tofan *demir oruq*

(8) ‘golden ring’ [gold ring]

Altay *altın yüstük*, Shor *altın čüstük*

Johanson (2006: 67) はこれは同一並置 (*identity apposition*; Johanson 1990: 190) と呼ばれるもので、修飾部の名詞は特性を表しているのではなく、実体に言及している、と述べている。加えて、この修飾関係が成り立つ必要条件として、修飾部と主要部の間に等位の関係が定着していることを挙げている。つまり、主要部の指示対象が修飾部によって示される実体であるか、その実体から成り立っていなければならない。したがって、修飾名詞と被修飾名詞とで一種の複合を成しているという。

さらに、修飾部—主要部の連続に要素の挿入は許されない。例えば、形容詞が修飾部である場合 (9)a は、形容詞二つを等位接続詞で繋げることで名詞を修飾させることが可能だが、同一並置の場合 (9)b はできないという。

(9) Tuvan:

- a. *čaraš bolyaş a:r örtectiy bilzek* b. **čaraš bolyaş altın bilzek*
 beautiful and expensive price ring beautiful and golden ring
 ‘the beautiful and expensive ring’, ‘the beautiful and golden ring’
 (Johanson 2006: 68; グロス は筆者による)

以上の議論をまとめると、Johanson (2006: 67) は同一並置が意味的な観点からも統語的な観点からも複合に近い特徴を持つと考えていると判断できる。

Johanson (2006: 67) は、範列的な形動詞、つまり語彙化されていない形動詞の特性についても、次のように述べている。アルタイ語 *kel-gen* [come-PTCP.PAST] は修飾部としても主要部としても用いられる。例えば、*kel-gen kiži* ‘a/the person who has come’, *kel-gen* ‘somebody/something that has come’ という例を挙げている。Johanson (2006: 76) は詳しく検討していないが、*kel-gen* は形容詞のいくつかの典型的な特徴を失っており、第一機能は名詞句の主要部である、と述べている。さらに、*kel-gen kiži* を同一並置と見なしている。その理由の一つに、形動詞 *kel-gen* がそのまま副詞として用いられないことを挙げている。動詞を副詞として用いる場合は副動詞 *kel-ip* を用いるという。

これらの記述から判断するに、Johanson (2006: 67) は、アルタイ語 *kel-gen kiži* を「来た人」と解釈しているのではなく、*kel-gen* 「来た人」+*kiži* 「人」と解釈しているようだ。

2.3. 問題提起

前節末で挙げたように、Johanson (2006: 76) は *kel-gen* [come-PTCP.PAST] の第一機能は名詞句の主要部であると述べ、*kel-gen kiži* [come-PTCP.PAST person] を同一並置と見なしている。チュルク諸語全般の概説である Johanson (1998: 50, 61) でも、*kel-gen kiži* のような構造を同一並置と見なしている⁶。本稿では、ウズベク語における類似の形式 ((1)を参照されたい) について、それが同一並置と見なせるかどうかについて検証する。

Johanson (2006: 67) は形容詞の諸特徴 (表 2 の下部) と比較しながら、形動詞の第一機能についても多少の分析を行っている。しかし、本稿はそのような立場を取らない。その根拠を以下に述べる。形容詞は一語から成る形式である。形動詞も一語から成る場合もあるが形容詞とは異なり、動詞の形態統語的な特徴 (項構造・否定・態など) を比較的よく保つ形式であると言えよう⁷。そのため、そもそも表 2 の下部で示されている特徴の点で異なっているということが予想される。したがって、これら二者を比べる際には、まず修飾部と主要部から成る構造において、形態統語的なふるまいを観察することが重要であろう。

次節から、修飾部・主要部に所有人称接辞が付きうるかという形態論的観点と、修飾部と主要部との間に要素の挿入ができるかという統語的観点からそれぞれ分析・考察を行う⁸。

⁶ Johanson (1998: 61) では、ウイグル語とアゼルバイジャン語の例が挙げられている (太字は筆者付す。これは形動詞接辞を指す): Uyghur *kelgen kiši* ‘a/the man who has come’, Azerbaijanian *oxu-duy-um kitab* ‘a/the book I read’ 後者は *oxu-duy-um kitab* [read-PTCP-1SG.POSS book] と分析される。

⁷ 風間 (2012: 140) に、アルタイ型言語の準動詞 (定形でない動詞の諸形式) は「項構造をはじめとする動詞の統語機能をよく維持する」との指摘がある。

⁸ ただし、本稿では、同一並置と区別する際には Johanson (2006: 67) で示された意味的な基準も用いている

3. 連体修飾の概要と比較

まず、3.1 節で形容詞と名詞による連体修飾について、次に 3.2 節で形動詞・動名詞による連体修飾について、それぞれの形態統語的なふるまいを示す。最後に、3.3 節で形動詞・動名詞による連体修飾を名詞・形容詞のものと比較する。そして、形動詞と動名詞が名詞・形容詞のどちらに近いかふるまいを見せるのかということをはっきりと明らかにし、2.3 節で提起した問題「ウズベク語においても形動詞＋名詞は同一並置なのか」に立ち戻って議論する。なお、出典の記載がない例文は対面調査⁹を通じて得られたものである。

3.1. 形容詞と名詞による連体修飾

2.2 節冒頭で述べたように、チュルク諸語は形容詞と名詞が形態的にはっきりと区別できない。Johanson (2006) は意味や機能にも着目した区別を行っているが、本稿では連体修飾における形態統語的な基準を中心に名詞と形容詞を区別する（ただし、同一並置の場合は、「修飾部が主要部の構成物である」(Johanson 2006: 67) という意味的な基準も必要となる。詳しくは (12) の前後で述べる)。

連体修飾の際、主要部に何も付けずに修飾する場合 (10) と、主要部に三人称所有接辞を付す場合 (11) がある。本稿では、前者の修飾部にあたる語を形容詞、後者の修飾部にあたる語を名詞と呼ぶ¹⁰。

(10) *katta uy*
big house

「大きい家」(Johanson 1998: 49)

(11) *daryo sohil-i*
river bank-3.POSS

「川岸」(Bodroligeti 2003: 1079)

ただし、修飾部が主要部の構成物である場合、修飾部に何も付かない。さらに要素の挿入を許さない。2.2 節で挙げた Johanson (2006) は、これを同一並置と呼んでいる。

(12) a. *temir yo'l*
iron way

「鉄道」(Bodroligeti 2003: 1078)

b. *tosh devor*
stone wall

「石壁」(Kononov 1960: 354)

(12)を見ると、形容詞修飾 (10) と同じ構造であるように見える。しかし、要素挿入の点で異なる。形容詞修飾 (13) では主要部名詞の直前に *bir* 「一」(この場合、名詞句が不定であることを表す) を挿入することができる。

(詳しくは 2.2 節と 3.1 節を参照されたい)。

⁹ 1985 年生のシルダリヤ州ヤングエル市出身である男性母語話者と対面調査を行った。媒介言語は日本語である。筆者の作例を示しながら許容度について尋ねるという形で調査を行った。

¹⁰ 名詞と形容詞は叙述機能を持つという点が共通している。次の例で示したように、どちらの場合もいわゆるコピュラ文の述部として機能する。

形容詞: <i>Bu katta.</i>	名詞: <i>Bu daryo.</i>
this big	this river
「これは大きい。」	「これは川だ。」

- (13) *katta bir uy* 「大きいある家」
big one house (Johanson 1998: 49)

一方、同一並置 (14) では *bitta* 「一つの」を挿入することはできないが、修飾部の前に置くことはできる。したがって、同一並置は要素間の統語的な結びつきが強いと言える。

- (14) a. **tosh bitta devor*
stone one wall
b. *bitta tosh devor*
one stone wall
「一つの石壁」

それでは、(11) のような所有複合の場合はどうであろうか。この場合はそもそも語と語の間に要素を挿入できないという (チュルク諸語全般については Johanson 1998: 50, ウズベク語については Bodrogligeti 2003: 1079 にそれぞれ記述がある)。Bodrogligeti (2003: 1079) は、修飾語は所有複合構造全体にのみ加えられると述べ、次の用例を挙げている。

- (15) a. [*vahimali [urush yil-lar-i]*]
terrible war year-PL-3.POSS
‘terrible war years’
b. [*katta [shahar darvoza-si]*]
big city gate-3.POSS
‘big city gate’
(Bodrogligeti 2003: 1079; [] は筆者付す)

もちろん、*bir* あるいは *bitta* も挿入できない。どちらかを入れるならば、修飾部に属格を付さねばならない。

- (16) a. **urush bir yil-lar-i*
war one year-PL-3.POSS
b. *urush-ning bir yil-lar-i*
war-GEN one year-PL-3.POSS
「戦争の、とある期間」
(17) a. **shahar bitta darvoza-si*
city one gate-3.POSS
b. *shahar-ning bitta darvoza-si*
city-GEN one gate-3.POSS
「町の、一つの門」

したがって、所有複合も、同一並置と同様に、統語的な結びつきが強いと言える。

次に、等位接続詞 *va* を用いた修飾部の構造に着目する¹¹。形容詞修飾では (18) のように等位接続詞を用いて複数の修飾部を取れる。

¹¹ これは林 (1995: 475) のトルコ語の所有複合についての記述を参考にした。林 (1995: 475) によれば、トルコ語の所有複合の場合、等位接続詞 *va* を用いて修飾部を複数取りうる。

- (18) a. *mehribon odam*
kind person
「優しい人」
- b. *yaxshi odam*
good person
「いい人」

- c. *mehribon va yaxshi odam*
kind and good person
「優しくてよい人」

所有複合の場合も同様である。(19c) に、修飾部を複数取る所有複合の例を挙げる。

- (19) a. *shahar aholi-si*
city population-3.POSS
「都市人口」
- b. *qishloq aholi-si*
village population-3.POSS
「地方人口」
- c. *[[Shahar va qishloq] aholi-si] nisbat-i urbanizatsiya daraja-si-ni*
city and village population-3.POSS ratio-3.POSS urbanization degree-3.POSS-ACC
ko'rsat-a-di.
show-NPST-3SG
「都市と地方人口の比率は都市化の程度を示す。」

(a.~ c. いずれも https://uz.wikipedia.org/wiki/Shahar_aholisi [最終閲覧日: 2017/12/08])

同一並置の場合は、(20) に示したように、複数の修飾部を取ることができない。

- (20) a. *tilla uzuk*
gold ring
「金の指輪」
- b. *kumush uzuk*
silver ring
「銀の指輪」
- c. **tilla va kumush uzuk*
gold and silver ring
「金と銀でできた (一つの) 指輪」

ただし、主要部名詞に複数名詞を付すと複数の修飾部を取れるようだ。しかし、この場合は「金と銀でできた一つの指輪が複数ある」のではなく、「金の指輪と銀の指輪がそれぞれ複数ある」ことを表す。

- (21) *tilla va kumush uzuk-lar*
gold and silver ring-PL
「金の指輪と銀の指輪 (それぞれ複数)」

(20c) の意味を表すためには、次のように言う。

- (22) *tilla va kumush-dan yasa-l-gan uzuk*
 gold and silver-ABL make-PASS-PTCP.PAST ring
 「金と銀で作られた (一つの) 指輪」

以上の観察を表 3 にまとめる (±の右に対応する例文番号をそれぞれ付す。なお二段目の列には例文番号が付されていないが、二段目の列の特徴は行内全ての例に当てはまる特徴である)。この下二列の欄 (要素の挿入、複数修飾) を見ると、形容詞修飾・所有複合・同一並置の順に+が多い。つまり、同一並置・所有複合・形容詞修飾の順に、要素間の統語的な結びつきが強いと言える。

表 3: 名詞・形容詞による連体修飾の形態統語的ふるまい

		形容詞修飾	所有複合	同一並置
形態的 特徴	修飾部に何も付かない	+ (10)	+ (11)	+ (12)
	主要部に必ず所有人称接辞	—	+	—
統語的 特徴	間に要素の挿入	+ (13)	— (15), (16), (17)	— (14)
	<i>va</i> を用いて複数修飾	+ (18)	+ (19)	— (20)

3.2. 形動詞と動名詞による連体修飾

本節では、形動詞と動名詞による連体修飾の統語的特徴について検討する。まず (23) のように、形動詞自体に何も付かない修飾構造について検討する。

- (23) *institut-da o'qi-gan odam*
 institute-LOC read-PTCP.PAST person
 「大学で学んだ人」

この場合、形動詞と主要部の間に要素を入れることができる。(24) では *bir* 「一」が挿入されている。

- (24) *institut-da o'qi-gan bir odam*
 institute-LOC read-PTCP.PAST one person
 「大学で学んだ {ある／一人の} 人」

次に、*va* を用いた複数の修飾部を取って、同一の指示対象を指せるかどうかについて検証する。インフォーマントに (25a) が「手紙を書いて送った人」と解釈できるか尋ねたところ、副動詞を用いた例 (25b) を挙げてもらった。その後に (25a) が「手紙を書いた人と送った人」とも解釈できるという指摘も得た。

- (25) a. *xat-ni yoz-gan va jo'nat-gan odam*
 letter-ACC write-PTCP.PAST and send-PTCP.PAST person
 「手紙を書いて送った人」
 「手紙を書いた人と送った人」

- b. *xat-ni yoz-ib jo'nat-gan odam*
 letter-ACC write-CVB send-PTCP.PAST person
 「手紙を書いて送った人」

ただし、(26) は、「リセで学び、大学で学んだ人」とは解釈できない、つまり同一指示にはならないと言う。

- (26) *litsey-da o'qi-gan va institut-da o'qi-gan odam*
 lycee-LOC read-PTCP.PAST and institute-LOC read-PTCP.PAST person
 「リセで学んだ人と大学で学んだ人」

したがって、(25), (26)のように、*va* を用いて複数の修飾部を取る場合、動詞の意味や文脈を頼りに同一指示になるかどうか判断されるのだろう。

次に形動詞自体に所有人称接辞が付く例 (27a) (= (5)) について検討する。この場合、(27b)のように、所有人称接辞が付かなくてもよい¹²。

- (27) a. *ular-ning restoran yaqin-i-da bo'l-ganlig-i sabab-i*
 3PL-GEN restaurant near-3.POSS-LOC be-PTCP.PAST-3.POSS cause-3.POSS

- b. *ular-ning restoran yaqin-i-da bo'l-ganlik sabab-i*
 3PL-GEN restaurant near-3.POSS-LOC be-PTCP.PAST cause-3.POSS
 「彼らがレストランの近くにいた原因」

この場合、形動詞と主要部名詞の間に要素を挿入することはできない。(28) は *bir* 「一」を、(29) は *katta* 「大きい」を、それぞれ挿入した例である。

- (28) **ular-ning restoran yaqin-i-da bo'l-ganlig-i bir sabab-i*
 3PL-GEN restaurant near-3.POSS-LOC be-PTCP.PAST-3.POSS one cause-3.POSS
 「彼らがレストランの近くにいた {ある／一つの} 原因」

- (29) **ular-ning restoran yaqin-i-da bo'l-ganlig-i katta sabab-i*
 3PL-GEN restaurant near-3.POSS-LOC be-PTCP.PAST-3.POSS big cause-3.POSS

¹² 修飾部における人称接辞の有無による意味の違いについては、現時点で筆者は答えを持ち合わせていない。これらの意味の違いを明らかにすることは今後の課題とする。

「彼らがレストランの近くにいた大きな原因」

しかし、(30) のように、*va* を用いて修飾部を複数取ることができる。

- (30) *ular-ning restoran yaqin-i-da bo'l-ganlig-i va shu hodisa*
 3PL-GEN restaurant near-3.POSS-LOC be-PTCP.PAST-3.POSS and that event
sodir bo'l-ganlig-i sabab-i
 appearance be-PTCP.PAST-3.POSS cause-3.POSS
 「彼らがレストランの近くにおり、その事件が起きた原因」

最後に、動名詞の例 (31) について検討する。(31) は動名詞自体に所有人称接辞が付いていないが、先に (6) で示したように所有人称接辞が付く例もある。

- (31) *Institut-ga kir-ish imkoniyat-i*
 institute-DAT enter-VN possibility-3.POSS
 「大学に入る可能性」

この場合でも、動名詞と主要部名詞の間に要素を挿入することはできない。(32) は *bir*「一」を、(33) は *katta*「大きい」を、それぞれ挿入した例である。

- (32) **Institut-ga kir-ish bir imkoniyat-i*
 institute-DAT enter-VN one possibility-3.POSS
 「大学に入る {ある／一つの} 可能性」
- (33) **Institut-ga kir-ish katta imkoniyat-i*
 institute-DAT enter-VN big possibility-3.POSS
 「大学に入る大きな可能性」

しかし、(34) のように、*va* を用いて修飾部を複数取ることができる。

- (34) *Litsey-da o'qi-sh va institut-ga kir-ish imkoniyat-i*
 lycee-LOC read-VN and institute-LOC read-VN possibility-3.POSS
 「リセで学び大学で学ぶ可能性」

以上の観察を表 4 にまとめる (表 3 と同様、土の右に対応する例文番号をそれぞれ付す。なお、二段目の列には例文番号が付されていないが、二段目の列の特徴は行内全ての例に当てはまる特徴である)。表中の「形動詞 I」は主要部に何も付かない場合を、「形動詞 II」は

必ず所有人称接辞が付く場合をそれぞれ指す¹³。

表 4: 形動詞・動名詞による連体修飾の形態統語的ふるまい

		形動詞 I	形動詞 II	動名詞
形態的 特徴	修飾部に何も付かない	+ (23)	+ / — (27)	+ / — (6), (31)
	主要部に必ず所有人称接辞	—	+	+
統語的 特徴	間に要素の挿入	+ (24)	— (28), (29)	— (32), (33)
	<i>va</i> を用いて複数修飾	? (25) / — (26)	+ (30)	+ (34)

3.3. 比較

本節では、形容詞と名詞による連体修飾と、形動詞と動名詞による連体修飾を比較する。3.1 節と 3.2 節の結果 (表 3 と表 4) をまとめ、表 5 に示す。この表は、主要部に必ず所有人称が付くかどうかで左右に分かれている。

表 5: 連体修飾の形態統語的ふるまいの比較

		所有 複合	形動詞 II と動名詞	形容詞 修飾	同一 並置	形動詞 I
形態的 特徴	修飾部に何も付かない	—	+ / —	+	+	+
	主要部に必ず所有人称接辞	+	+	—	—	—
統語的 特徴	間に要素の挿入	—	—	+	—	+
	<i>va</i> を用いて複数修飾	+	+	+	—	?

まず、表 5 の左側、つまり主要部に必ず所有人称接辞が付く場合 (「所有複合」と「形動詞 II / 動名詞」) について考察を述べる。これらは同じ統語的特徴も持つ。修飾部と主要部の間に要素を挿入することができないが (所有複合: (15), (16), (17), 形動詞 II: (28), (29), 動名詞 (32), (33)), 等位接続詞 *va* を用いて複数の修飾部を取ることができる (所有複合: (19), 形動詞 II: (30), 動名詞: (34))。したがって、「形動詞 II」と「動名詞」は「所有複合」に近い構造とみなすことができる。

次に、表 5 の右側、つまり主要部に所有人称接辞が付かない場合 (「形容詞修飾」「同一並置」「形動詞 I」) について考察を述べる。これらはそれぞれ統語的特徴が異なっている。以下から「形動詞 I」を「形容詞修飾」「同一並置」と比べながら議論を進める。「形動詞 I」は、修飾部と主要部の間に要素を挿入することができるという点で「形容詞修飾」に近い特徴を持つ (形容詞: (13), 形動詞 I: (24))。一方、「形動詞 I」は、等位接続詞 *va* を用いて複数の修飾部を取ることができる場合もできない場合も (25a)、単にできない場合 (26) もある

¹³ Schönig (1998: 415) はアルタイ語の関係節 (筆者注: 主要部と形動詞との間に格関係が想定できる場合) では主要部に所有人称接辞が付くと述べている。したがって、アルタイ語の場合でも (23), (24), (25) のような場合、修飾部には所有人称接辞が付かず、主要部に所有人称接辞が付くと考えられる。ただし、(27), (28), (29), (30) のように主要部と形動詞との間に格関係が想定できない場合については不明である。

ため、「形容詞修飾」「同一並置」どちらに近いかの判断ができない。

ここで、再度 2.2 節で挙げた Johanson (2006) の議論に立ち戻りつつ、2.3 節で提起した問題について議論する。Johanson (2006: 67) は、アルタイ語 *kel-gen* は形容詞のいくつかの典型的な特徴を失っており、第一機能は名詞句の主要部であると述べ、*kel-gen kiži* を同一並置と見なしている。筆者は、2.3 節でウズベク語における形動詞＋被修飾名詞という形式について、それが同一並置と見なせるかどうかについて検証する、と述べた。しかし、本稿では、形動詞＋被修飾名詞の場合、同一並置と異なる特徴（要素の挿入ができる）が観察された。したがって、ウズベク語においては、形動詞＋被修飾名詞のような構造は同一並置ではない、と結論づけられる。

4. おわりに

本稿では、まず形容詞と名詞による連体修飾と、形動詞と動名詞による連体修飾それぞれのデータを提示した（以上、3.1 節と 3.2 節）。そしてそれらを、特に要素の挿入ができるかどうか、複数の修飾部を取れるかどうかという統語的な観点から比較したうえで、形動詞＋被修飾名詞は同一並置ではないと結論付けた（以上、3.3 節）。

今後、形動詞＋被修飾名詞という構造が統語的特徴の点で形容詞修飾構造とも同一並置構造ともなぜ完全に一致しないのか、という問題について考えていく必要がある。

謝辞

本稿の執筆にあたり、二名の匿名査読者より有益なコメントを多数いただきました。ここに記して感謝申し上げます。また、調査に協力いただいたコンサルタントの方にも心より感謝申し上げます。

略号一覧

-		接辞境界	LOC	locative	位置格
=		接語境界	NAME	proper noun	固有名詞
1, 2, 3		1, 2, 3 人称	PASS	passive	受動
ABL	ablative	奪格	PAST	past	過去
ACC	accusative	対格	PL	plural	複数
ADJLZ	adjectivalizer	形容詞化	POSS	possessive	所有
ADVLZ	adverbializer	副詞化	PROG	progressive	進行
CONT	continuative	継続	PTCP	participle	形動詞
CVB	converb	副動詞	REFL	reflexive	再帰
DAT	dative	与格	SG	singular	単数
GEN	genitive	属格	VN	verbal noun	動名詞

参考文献

- Abdurahmonov, G'. A. va Sh. Sh. Shoavdurahmonov, A. P. Hojiyev (1975) *O'zbek tili grammatikasi I-tom Morfologiya*. [ウズベク語文法 第1巻 形態論] Toshkent: O'zbekiston SSR "Fan" nashriyoti.
- Asqarova, M. va R. Jumanioyozov (1953) *O'zbek tilida ravishdosh va sifatdoshlar Hozirgi zamon*

- o'zbek tili kursidan materiallar*. [ウズベク語における副動詞と形動詞 現代ウズベク語クラスからの用例] Toshkent: O'zSSSR fanlar akademiyasi nashriyoti.
- Bodrogligeti, András J. E. (2003) *An academic grammar of Modern Literary Uzbek*. München: Lincom Europa.
- 林徹 (1995)「現代トルコ語の Possessive Compound について」『東京大学言語学論集』14: 463-479.
- 日高晋介 (2016)「ウズベク語における動名詞・形動詞の機能的差異—補文節として用いられる場合について—」『言語・地域文化研究』22: 137-154.
- Hidaka, Shinsuke (2016) *Is the -ar/-mas Participle a Participle in Uzbek?* Concall-2 handout.
- Johanson, Lars (1990) Studien zur türkeitürkischen Grammatik. [Studies on Turkish grammar] Hazai, György (ed.) *Handbuch der türkischen Sprachwissenschaft*. 1. Budapest: Akadémiai Kiadó. 146-278.
- (1998) Structure of Turkic. Johanson, Lars and Éva Á. Csátó (eds.) *The Turkic languages*. 30-63. London, New York: Routledge.
- (2006) Nouns and Adjectives in South Siberian Turkic. Erdal, Marcel & Nevskaya, Irina (eds.) *Exploring the Eastern Frontiers of Turkic*. (Turcologica 60.) 57-78. Harrassowitz: Wiesbaden.
- 風間伸次郎 (2012)「アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて」『北方言語研究』2: 139-162.
- Kononov, A. N. (1960) *Grammatika sovremennogo Uzbekskogo literaturnogo iazyka*. [現代標準ウズベク語文法] Moskva, Leningrad: Izdatel'stvo akademii nauk SSSR.
- Reshetov, V. V. va S. I. Ibrohimov, U. T. Tursunov, F. K. Kamolov (1966) *Hozirgi O'zbek Adabiy tili I Fonetika, Leksikologiya, Morfologiya*. [現代ウズベク標準語 I 音韻論、語彙論、形態論] Toshkent: O'zbekiston SSR "Fan" nashriyoti.
- Schönig, Claus (1998) *South Siberian Turkic*. In Johanson, Lars and Éva Á. Csátó (eds.) 403-416.

The Syntactic Functions of Participles and Verbal Nouns in Uzbek: a Focus on the Attributive Function

Shinsuke HIDAKA
(Tokyo University of Foreign Studies)

In this study, I examined the attributive structure of the syntactic functions of participles and verbal nouns in Uzbek from morphological and syntactic standpoints; I investigated whether the syntactic functions have an adjectival property or a nominal property as well as whether an attributive structure of a participle in Uzbek indicates *identity apposition* (Johanson 1990: 190).

Johanson (2006: 76) identifies an attributive structure of a participle, such as in *kel-gen kiži* ‘a/the person who has come’ in Altay as *identity apposition*. Uzbek and Altay belong to the Turkic languages. Therefore, I assumed that participle + head noun in Uzbek also indicates *identity apposition*. I compared constructions (participle + head noun and *identity apposition*) to test the accuracy of my assumption.

Table 1 presents the results of my analysis; “PC” and “IA” represent possessive compound and identity apposition, respectively. In addition, “ptcp I” expresses cases in which no elements are attached to a dependent (participle) and “ptcp II” expresses cases in which the head noun has a possessive suffix. The Table is divided based on whether the head noun has a possessive suffix. Finally, I conclude that identity apposition is not an attributive structure of a participle in Uzbek.

Table 1: Comparison with behaviors of ptcp (participle) and vn (verbal noun)

		PC	ptcp II and vn	adj. modifying	IA	ptcp I
morphological features	no attachment to dependent	—	+ / —	+	+	+
	a head suffixed possessive suffix	+	+	—	—	—
syntactic features	an insertion of elements	—	—	+	—	+
	plural modification by coordinating conjunction <i>va</i>	+	+	+	—	—

(ひだか・しんすけ hidaka.shinsuke.g0@tufs.ac.jp)